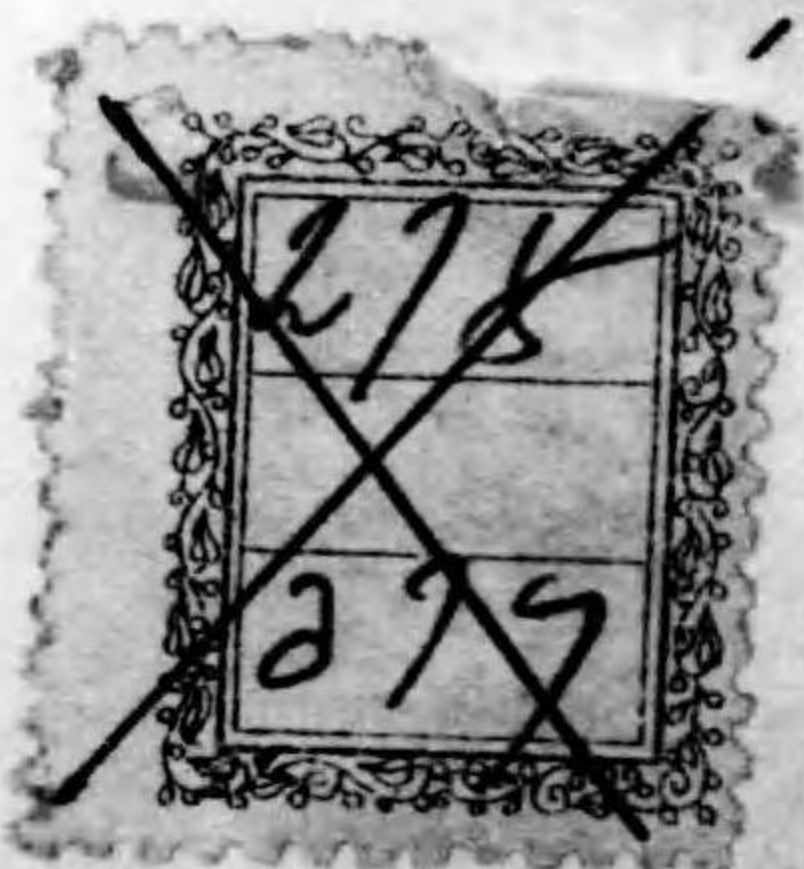


喇
叭
教
程

特100

524



始



持100
524

陸普第二一七七號

喇叭教程規定ノ件達

陸軍一般

喇叭教程別冊ノ通定△

大正四年八月九日

陸軍大臣岡市之

正
4. 8. 19
内交



喇叭教程目次

總則	一頁
第一篇 喇叭ニ關スル學理	二
第一章 音符、默符	二
第二章 譜表、音名、衡程、復奏及返奏	七
第三章 拍子及舉動	一二
第四章 正節記號、連接、通達點、停滯點、舌旋法、 速度及略符	一六
第二篇 喇叭教育	二一
第一章 一般ノ要領	二一

第二章	喇叭ノ構造、分解及各部ノ機能	二二
第三章	喇叭ノ取扱及手入法	二七
第四章	基本演習	三〇
第五章	本譜演習	三八
附 錄	基本演習譜(附陸軍喇叭譜應用ノ例)	

喇叭教程目次終

喇叭教程

總 則

第一 喇叭ハ音譜ニ依リテ號令命令ヲ傳ヘ又ハ志氣ヲ鼓舞シ敬意ヲ表シ軍容ヲ整フル等ニ用フルモノナレハ其吹奏ノ正否ハ軍紀軍秩ニ關聯スルノミナラス時トシテハ直ニ戰鬥ノ勝敗ニ影響ヲ及ホスコトアリ故ニ喇叭手ハ沈著剛膽容儀端正ニシテ義務心ニ富ミ吹奏ニ習熟シ劍電彈雨ノ下ニ於テ益々其能力ヲ發揮シ得サルヘカラス

第二 喇叭修業者ハ身體強健特ニ肺力強ク言語明晰多少ノ文筆ト音樂的趣味ヲ有スル者ヨリ選拔スルモノトス而シテ口幅狹ク唇薄ク齒列

整密ニシテ門齒過度ニ大ナラサルハ又撰定ノ要件ナリ

第三 喇叭修業者ノ教育ハ聯隊（聯隊ヲ成ササル隊ニ在リテハ大隊又ハ獨立隊以下同シ）喇叭長之ニ任シ聯隊副官之ヲ監督スルモノトス

喇叭手ノ教育モ亦修業者ノ教育ニ準シテ實施ス但步兵隊ニ在リテハ大隊毎ニ大隊喇叭長之ニ任シ聯隊喇叭長ハ節調ノ齊一ニ任シ大隊副官之ヲ監督スルモノトス

第四 節調ハ陸軍喇叭譜ニ依リ奏音ハ嚴格、爽快、純正ナルヲ要ス

第一篇 喇叭ニ關スル學理

第一章 音符、默符

第五 喇叭譜ハ音符、默符及其他ノ記號ヲ以テ示ス

第六 音符ハ發音ノ時間ヲ默符ハ發音中ノ默止時間ヲ示ス記號ニシテ此等ノ時間ハ假リニ步數ヲ以テ示ス

第七 音符ノ種類名稱左ノ如シ

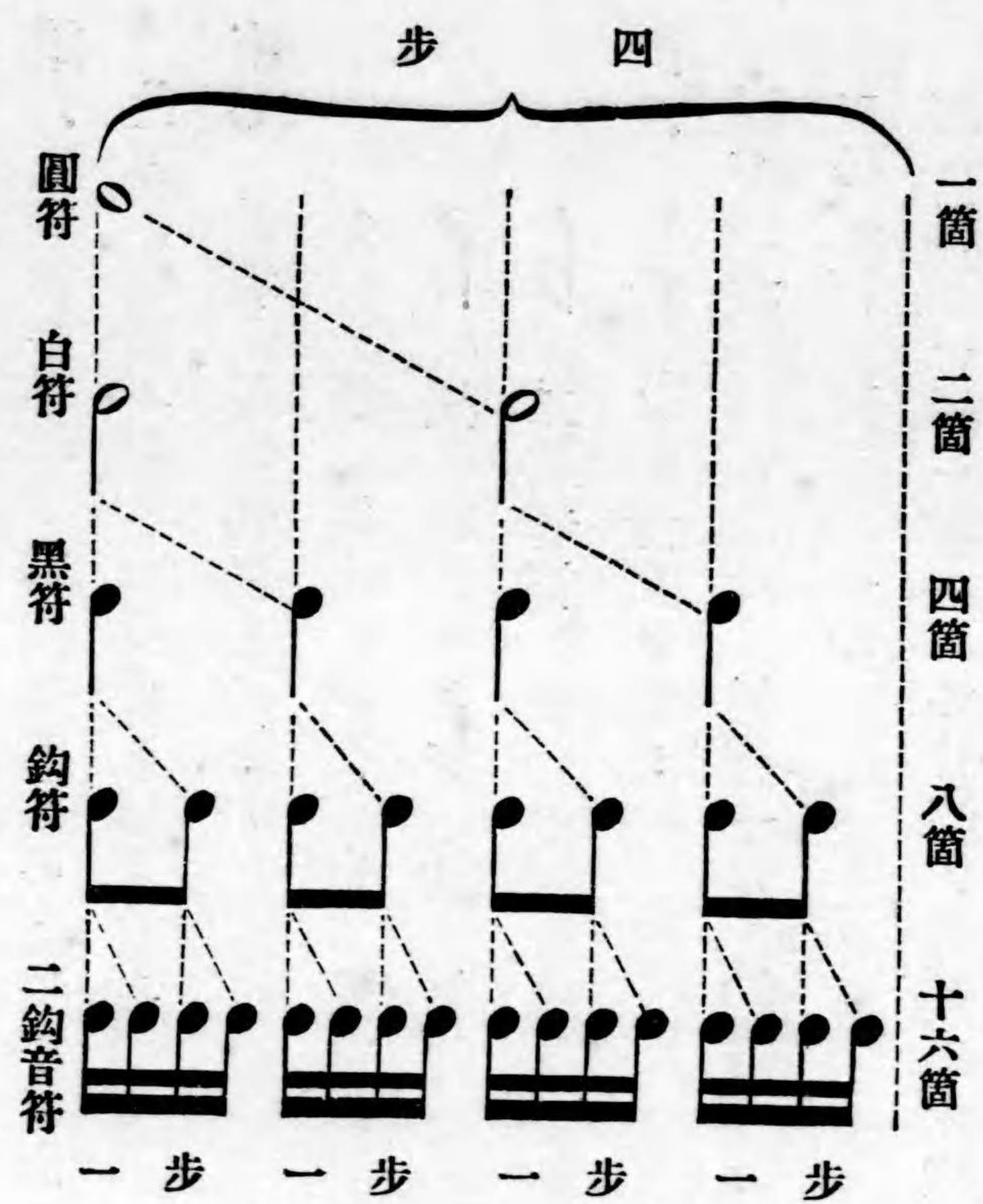
○	圓符	ρ	白符
◡	黑符	┌	鈎符
▮	二鈎音符		

第八 各音符ノ時量左ノ如シ

圓符四步 白符二步 黑符一步 鈎符半步
 二鈎音符 四分ノ一步

即チ圓符一箇ニ對スル各音符ノ時量ヲ比較スルトキハ左ノ如シ

第九 黙符ノ種類名稱左ノ如シ



備考

有鈎符(●)二箇以上連續スルトキハ圖ノ如ク脚下ノ鈎ヲ連結シテ記載スルコトアリ

一 休符
二 息符
三 半息符
四 二鈎息符

第十 各黙符ノ時量左ノ如シ

休符四歩 半休符二歩 息符一歩 半息符半歩
二鈎息符 四分ノ一歩
音符ト黙符ノ時量ヲ比較スルトキハ左ノ如シ
四歩 二歩 一歩 半歩 四分ノ一歩



第十一 音符、黙符ニハ加點ヲ附シ其時量ヲ増加スルコトヲ得加點ハ其符固有時量ノ二分ノ一ヲ増加スルモノニシテ二歩ノ時量符ニ之ヲ附スルトキハ三步トナリ一步ノ時量符ニ之ヲ附スルトキハ一步半トナル其一例ヲ示セハ左ノ如シ

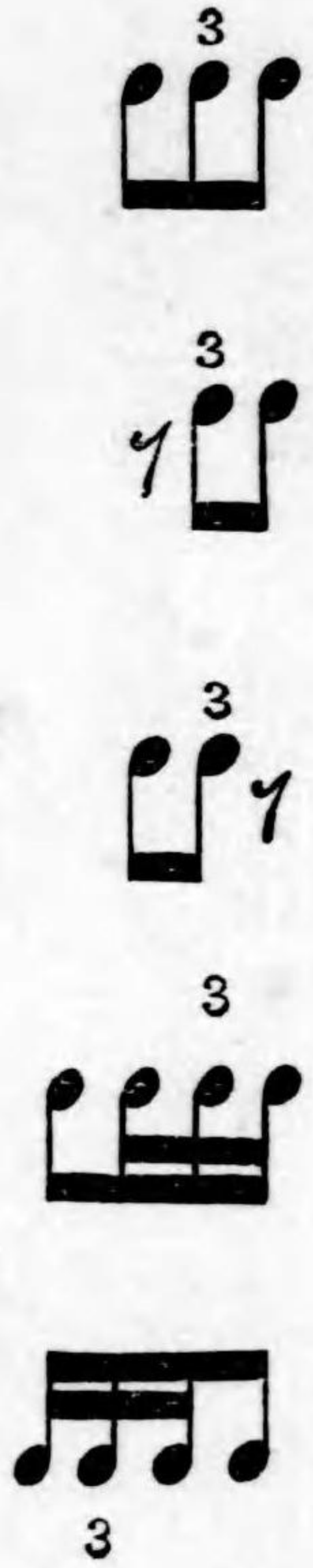


時量一步半トナリ其結果
ハ下圖ト同一ナリ



第十二 同一時量ヲ有スル音符(或ハ黙符トノ併合)三箇ノ上方若ハ下方ニ3ノ數字ヲ附シ固有ノ時量ヲ變スルコトアリ之ヲ三連符ト謂フ

三連符ハ其符固有時量ノ三分ノ一ヲ減スルモノニシテ例ヘハ半歩ノ時量符三箇ハ其固有時量一步半ナレトモ一步ニ減シ又四分ノ一步ノ時量符三箇ハ其固有時量四分ノ三步ナレトモ之ヲ半歩ニ減スルカ如シ



第二章 譜表、音名、衡程、復奏及返奏

第十三 音符、黙符及其他ノ記號ヲ以テ樂譜ヲ記載スル爲五本ノ水平線ヲ描ケル用紙ヲ譜表ト謂フ

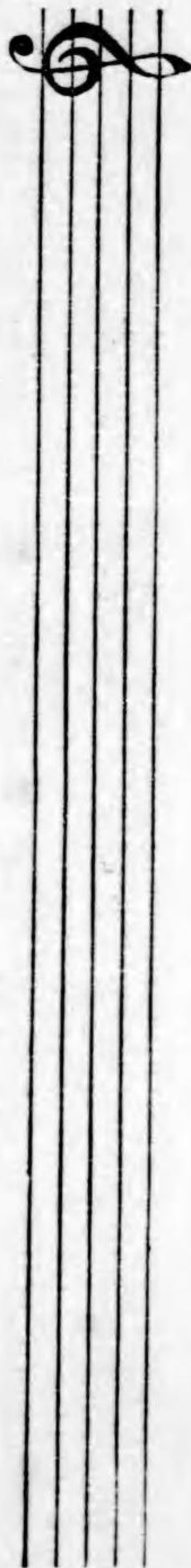
而シテ便宜上左ノ如キ名稱ヲ附ス



第十四 譜表ノ五水平線ノ外ニ尙一小線ヲ附加スルコトアリ之ヲ補線

ト謂フ(第十七と音参照)

第十五 一定ノ樂譜ニハ譜表ノ始ニ鍵形記號ヲ附ス之ヲ音部記號ト謂フ



第十六 喇叭ヨリ發スル音ハ高低順序アル五箇ノ單聲音ニシテ下方ヨ

リ「ど」「と」「た」「て」「ち」ナル音名ヲ附ス

第十七 右ノ五音ハ譜表面ニ於テ一定ノ位置ヲ占メ音階ヲ成形ス
圓符ニテ示セル五音ノ位置左ノ如シ



第十八 樂譜ノ全節調ヲ縦線ヲ以テ等分シ此兩縦線間ヲ衡程ト謂フ

第十九 縦線ニ單縦線、複縦線ノ二種アリ複縦線ハ通常節調ノ段落ヲ
示スニ用フ



第二十 同一樂譜ヲ繰返シテ二回吹奏スルコトアリ其小部分ノモノヲ復奏ト謂ヒ大部分ノモノヲ返奏ト謂フ

第二十一 復奏スヘキ句節ノ兩端ニハ二小點ヲ附シタル複縦線ヲ記入ス之ヲ復奏記號ト謂ヒ此小點ノ對向スル句節間ハ繰返シテ二回吹奏スルモノトス但I IIノ區劃ヲ有スル復奏ニ在リテハ第一回ニI區劃内ヲ第二回ニII區劃内ヲ吹奏スルモノトス



第二十二 返奏記號ニハ左ノ如キ二種ノ記號ヲ用フ

第一種 D.C. 第二種

第一種返奏記號ハ樂曲ノ終ニ記入スルモノニシテ其曲ノ始ヨリ此記號ニ至ル間ヲ返奏スルモノトス
 第二種返奏記號ハ一樂曲中ノ二箇所ニ記入スルモノニシテ此兩記號間ヲ返奏スルモノトス

第二章 拍子及舉動

第二十三 衡程ノ時量二歩ナルモノト四歩ナルモノトアリ前者ヲ二拍子ト謂ヒ後者ヲ四拍子ト謂フ

拍子ハ樂曲ノ始音部記號ノ次ニ拍子記號ヲ記シテ之ヲ示スモノトス

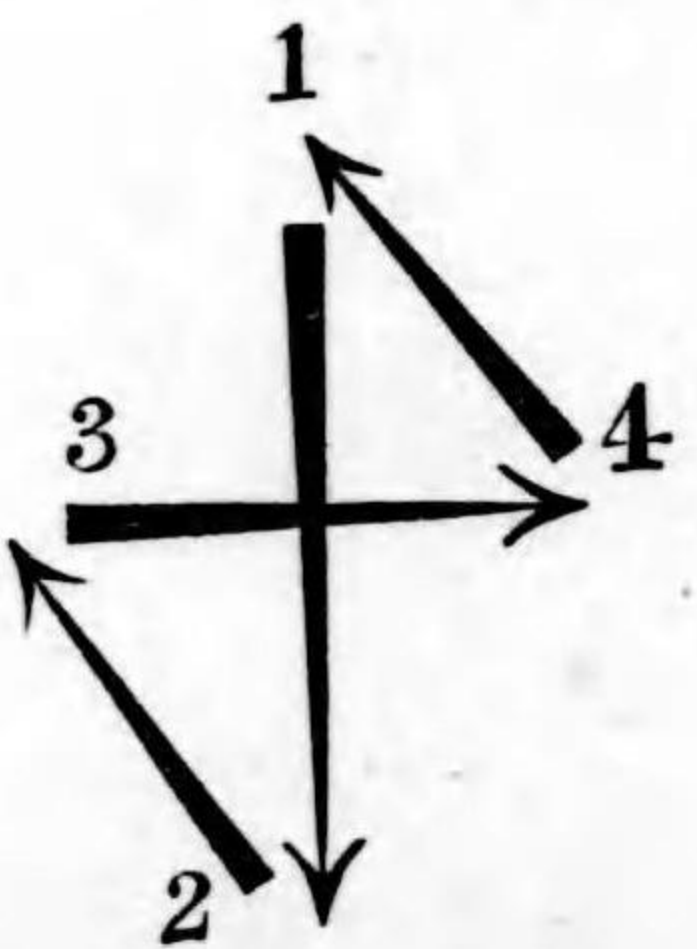


二拍子記號



四拍子記號

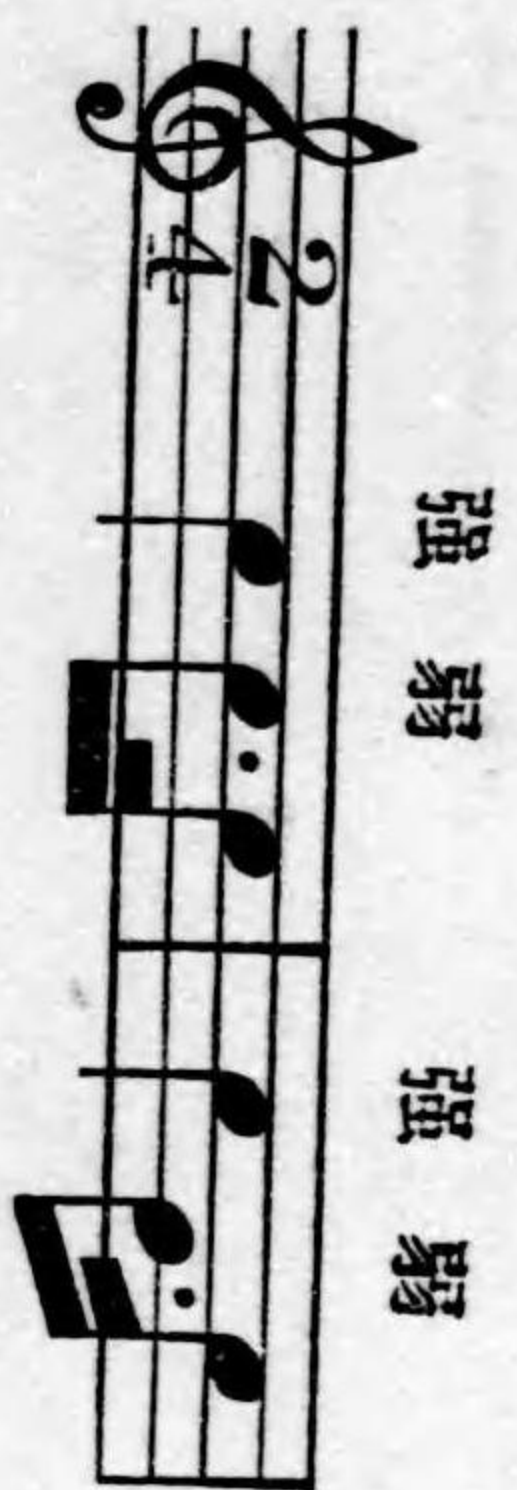
第二十四 指揮官ハ右(左)手ヲ左ノ如ク振動シテ拍子ヲ執ル之ヲ拍子法ト謂フ喇叭手ハ之ニ依リ時量ヲ諳讀シ吹奏ノ速度ヲ齊一ナラシムルモノトス



第二十五 右ノ拍子法ニ於テ二拍子ニ在リテハ1ト唱ヘテ手ヲ下クルヲ第一舉動、2ニテ再ヒ舉クルヲ第二舉動ト謂ヒ四拍子ニ在リテハ1ニテ下クルヲ第一舉動、2ニテ斜左ニ舉クルヲ第二舉動、3ニテ水

平ニ右ニ出スヲ第三舉動、4ニテ斜左發起點ニ復歸スルヲ第四舉動ト謂フ

第二十六 舉動ノ性質ニ強弱ノ二種アリ而シテ第一舉動ハ強ク第三舉動ハ半強ニシテ其他ハ弱性質ヲ有ス



備考 半強舉動ハ強性質ノ部類ニ入ルモノトス

第二十七 弱舉動若強舉動ト連結スル場合ニ在リテハ此弱舉動ハ強性質ニ變シ次ノ強舉動ハ弱性質ニ變スルモノトス之ヲ移遷舉動ト謂



強強弱

第二十八 樂曲ノ開始ハ強性質ヲ有ス故ニ第二、第四舉動ノ如キ弱性質ノモノヲ以テ始マルトキニ在リテモ其舉動ハ強性質トナルモノトス之ヲ移遷舉動ト謂フ



強弱

強弱

第四章 正節記號、連接、通達點、停滯

點、舌旋法、速度及略符

第二十九 普通ノ奏音ハ總テ純正ナルヲ要ス然レトモ某音ニ限リ特ニ強ク長ク稍、壓へ著クル如ク吹奏スルヲ要スルコトアリ此場合ニ在リテハ音符ノ上方若ハ下方ニ左ノ如キ記號ヲ附ス之ヲ正節記號ト謂フ



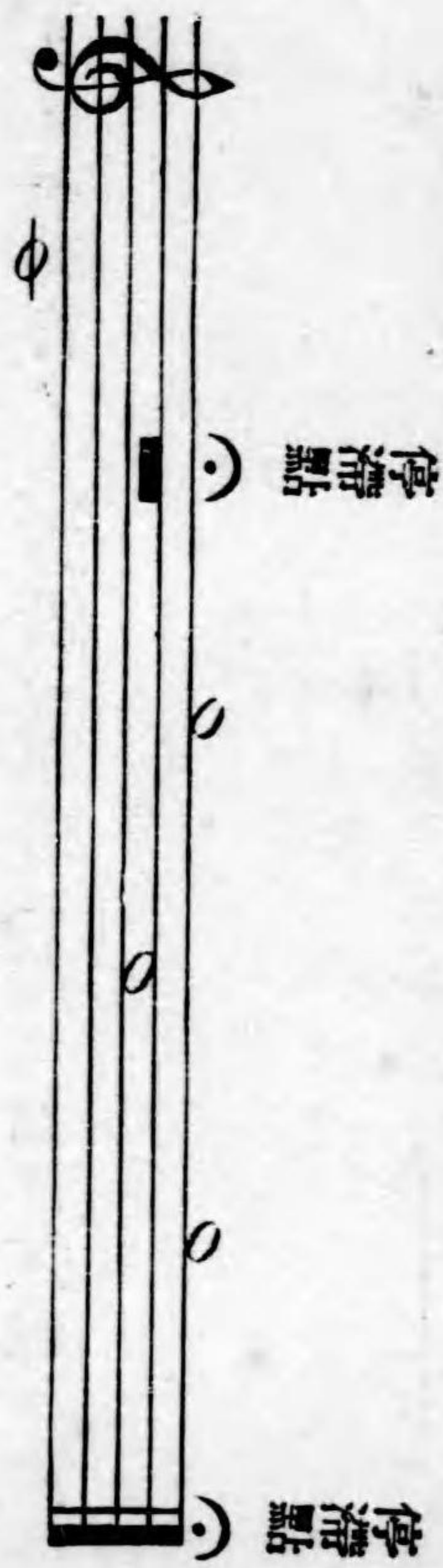
第三十 二箇以上ノ同種又ハ異種音符ヲ結合シ之ヲ滑奏セシムル場合

ニ在リテハ音符ノ上方若ハ下方ニ左ノ如ク弦線ヲ附ス之ヲ連接ト謂フ



第三十一 節調ノ特種ナル要點又ハ樂曲ノ段落ニ於テハ奏音ヲ自然ニ終ラシムルト共ニ音響ヲ遠距離ニ徹底セシムル爲一音符ヲ其固有時量ノ長短ニ關セス適度ニ延長シテ吹奏ス之ヲ通達點ト謂ヒ左ノ如キ記號ヲ以テ之ヲ示ス

第三十二 一默符又ハ複縦線上ニ通達點ト同形状ノ記號ヲ附スルモノヲ停滯點ト謂フ而シテ默符上ニ在ルモノハ吹奏ヲ暫時停止スルコトヲ示シ複縦線上ニ在ルモノハ其曲ノ最終ヲ示スモノトス

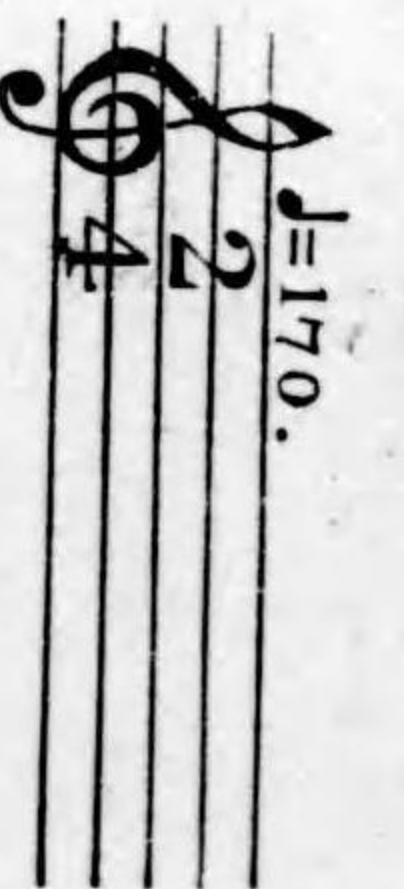
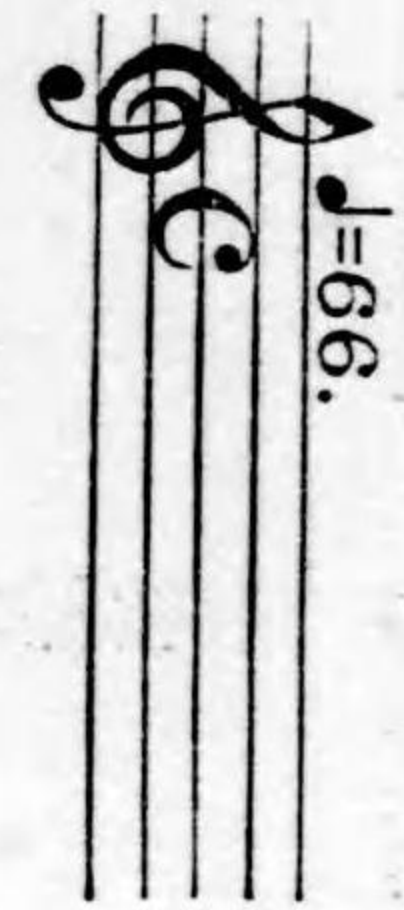


第三十三 樂曲中ニハ屢ニ二鈎音符ヨリ成ル三連符アリ此吹奏法ハ吹力ニ應シ舌尖ヲ急激圓滑ニ旋回スルモノトス之ヲ舌旋法ト謂フ



第三十四 拍子ノ時量何歩ナルヤハ衝程内ニ在ル音符、默符ニ依リ之ヲ知ルヲ得ヘキモ此各一步ノ速度ハ一定ニ非スシテ樂曲ノ種類ニ依リ異ナルカ故ニ各樂曲ノ速度ヲ示スニハ別ニ其始ニ ♩ || 114 ♩ || 170ノ如キ速度數字ヲ記シ一分時間ノ歩數ヲ示スモノ

トス例へハ君カ代ニハハ || 66ヲ附シ其速度一分時間ニ六十六歩ナル
コトヲ示シ駈歩ニハハ || 170ヲ附シ其速度一分時間ニ百七十歩ナル
コトヲ示スカ如シ



第三十五 便宜上正式ノ譜記ニ代へ略符ヲ用フルコトアリ其例左ノ如
シ

第三十五 便宜上正式ノ譜記ニ代ヘ略符ヲ用フルコトアリ其例左ノ如シ

正記
略記

The first system of music shows a comparison between a full score (正記) and a shorthand score (略記). The full score is written in treble clef with a common time signature (C). The shorthand score uses numbers 3 and 7 to denote triplets and groups of seven notes respectively.

正記
略記

The second system of music shows a comparison between a full score (正記) and a shorthand score (略記). The shorthand score uses a double slash (//) to denote a double bar line.

正記
略記

The third system of music shows a comparison between a full score (正記) and a shorthand score (略記). The shorthand score uses a number 4 to denote a group of four notes.

二〇ノ次入ル

第二篇 喇叭教育

第一章 一般ノ要領

第三十六 喇叭教育ヲ分チテ基本演習及本譜演習ノ二ト爲シ學科ニ於テ喇叭ノ構造、分解手入法、學理、唱譜、聞記等ヲ、術科ニ於テ喇叭ノ操作、吹奏及指揮法ヲ教育スルモノトス

第三十七 基本演習ハ喇叭ノ基礎教育ニシテ又節調ヲ矯正スルニ適ス故ニ反覆叮嚀ニ之ヲ教育シ奏法ヲ正確ナラシメ熟練者ニ在リテモ演習開始ニ當リ屢々之ヲ復習シ其節調ヲ整フルヲ要ス

第三十八 本譜演習ハ基本演習ニ於テ修得セシ伎倆ヲ活用シ陸軍喇叭譜ヲ吹奏シ之ヲ練磨セシムルモノトス

第三十九 喇叭修業者ノ教育ハ吹奏ノ完全ナルコトヲ主眼トシ術科ニ重キヲ置キ教育時間ノ大部分ヲ之ニ充ツルヲ要ス而シテ學理ハ唯術科ト直接關係アルモノノミニ止メ現在教育中ナル樂譜上ニ現ハルルモノニ就キ其大要ヲ單簡ニ口授スルヲ以テ足レリトス

第四十 軍隊號音ハ初年度ノ教育ニ在リテハ自隊ト直接關係アルモノノミニ止ムルヲ適當トス

第四十一 熟練ノ喇叭手ト雖長ク吹奏ヲ中絶スルトキハ純正ニ發音シ得サルニ至リ又嚴密ナル監督ヲ缺クトキハ忽チ不正ノ奏法杜撰ナル節調ヲ用フルニ至ルモノトス

第四十二 第二年度以後ニ於テハ既修ノ技能ヲ復習練磨スルト共ニ必要ナル補綴ヲ爲シ完備ノ域ニ至ラシムルヲ要ス

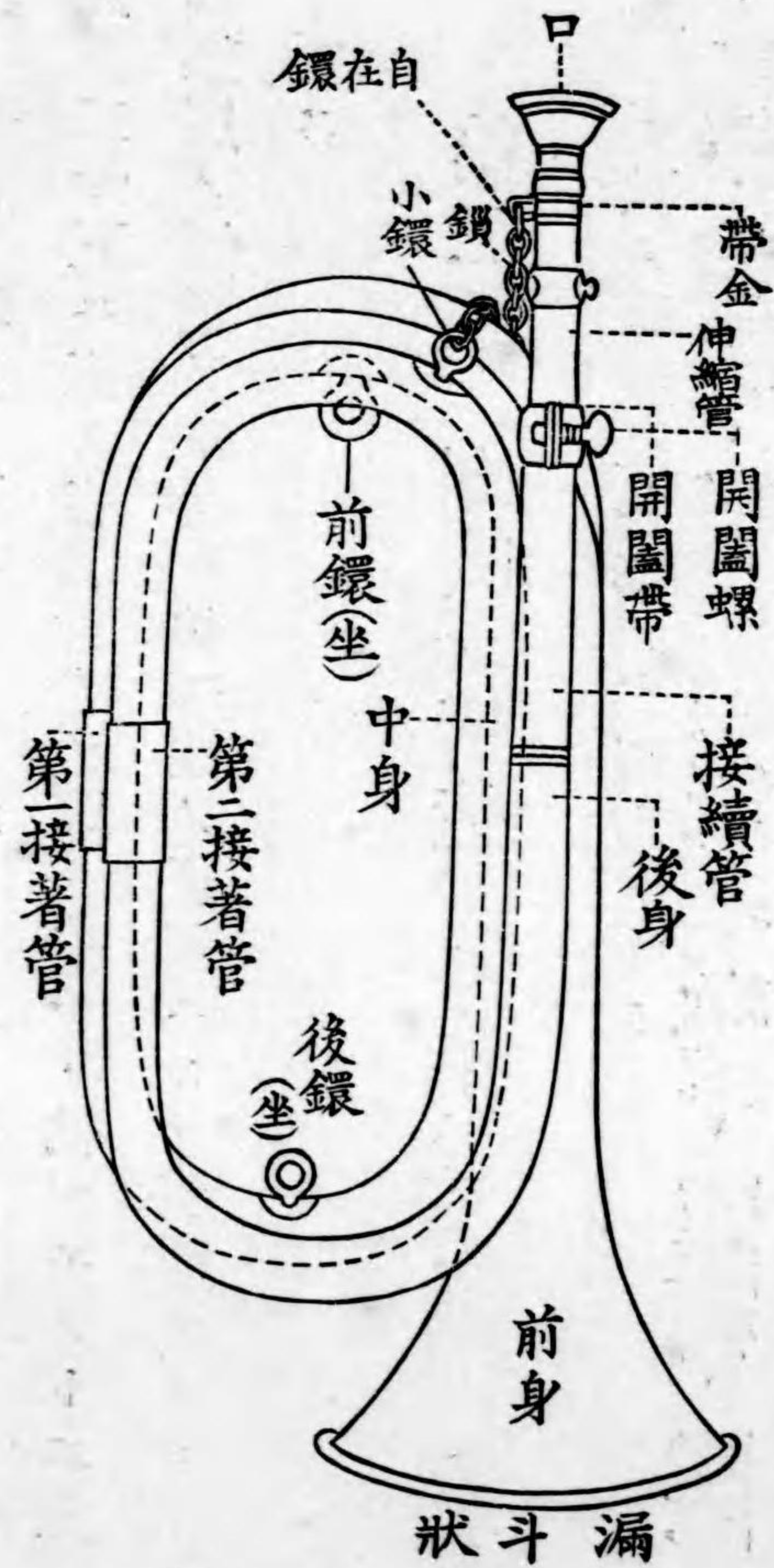
第四十三 喇叭長候補者ノ爲ニハ尙進ンテ學理ヲ教ヘ唱譜、聞記等ニ依リ其技能ヲ高メ特ニ聽力ノ發達ヲ圖リ且拍子法及指揮術ノ練磨ヲ爲スモノトス

第四十四 吹奏ヲ教育シ又ハ多數ノ者ノ速度ヲ整調スル爲指揮官ハ第二十四第二十五ニ依リ右(左)手ヲ以テ拍子ヲ執ルモノトス此際指揮官ハ其態度ノ嚴正ヲ維持シ拍子法ノ正確ニシテ判明ナルコトニ注意スルヲ要ス

第二章 喇叭ノ構造、分解及各部ノ機能

第四十五 喇叭ノ構造及各部ノ名稱左ノ如シ
口、帶金、自在環、鎖、伸縮管、接續管、開闔帶、開闔螺、前

第一圖

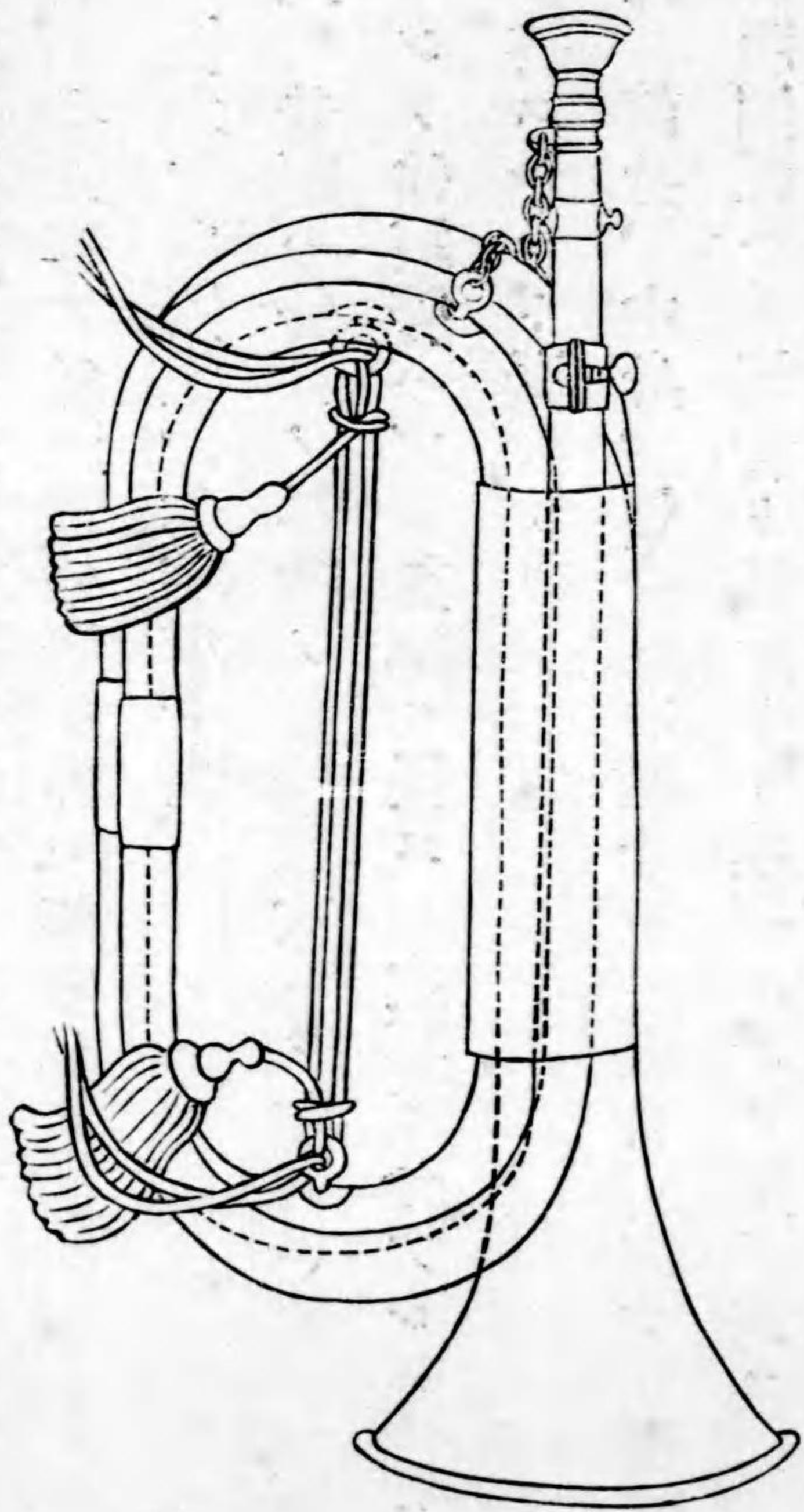


第一接著管、第二接著管、漏斗狀
 分) 身、(漏斗狀ヨリ第一接
 著管ニ至ル部分) 中身、(第一接著管ヨリ第二
 接著管ニ至ル部分) 後身、(第二接著管ヨリ
 後身、(開闔螺ニ至ル部
 分) 小環、前環、後環、前環坐、後環坐
 セツチャククワン、ロウトシヤウ
 セツチャククワン、コウクワン
 センクワン、コウクワン
 センクワン、コウクワン
 センクワン、コウクワン

屬品 カザリヒモ、ニギリマキ、ヌグヒキレ
 飾紐、握卷、拭巾

第四十六 飾紐ハ喇叭手ノ體格ニ應シ頸ニ懸ケ若ハ左肩ヨリ右脇ニ懸
 クルニ適當ナル長サニ附著シ兩端ノ總ハ喇叭ノ取扱ヲ容易ナラシム
 ル爲其上方一乃至二珊瑚突ノ處ヲ環ニ附著スルヲ適度トス

第二圖



第四十七 手入等ノ爲通常分解シ得ル部分左ノ如シ
飾紐、握卷、開闔螺、伸縮管、口

第四十八 音調ハ各人ノ唇齒ノ關係及吹奏ノ如何ニ依リ差異ヲ生スル
モノニシテ伸縮管ハ之カ加減ニ任スル主要部分ナレハ常ニ伸縮ノ自
在ヲ維持スルコト緊要ナリ

第四十九 前身、中身、後身就中漏斗狀ハ發音ニ大ナル關係ヲ有シ開
闔帶及開闔螺ハ伸縮管ト後身トヲ連接スルノ用ヲ爲ス

第五十 前環及後環ハ飾紐ヲ附著スルノ用ヲ爲ス

第五十一 小環ハ鎖ヲ支持スルモノニシテ帶金及鎖ト相俟チテ口ノ落
脱ヲ防クモノトス

第三章 喇叭ノ取扱及手入法

第五十二 喇叭ノ取扱法ハ各兵種ノ操典ニ據ル

第五十三 喇叭ハ軟質ノ金屬ヨリ成ルヲ以テ叮嚀ニ取扱フヲ要ス

第五十四 喇叭ノ手入不十分ナルトキハ各部ノ機能ヲ害シ又微細ナル
損傷ト雖音色ヲ甚シク損スルコトアルヲ以テ注意スヘシ

第五十五 口及伸縮管内部ニ唾液停滯スルトキハ惡臭ヲ放チ且音調ヲ
妨クルヲ以テ注意スヘシ

第五十六 黃銅部ハ唾液ノ飛沫、汗、水分等ノ爲汚點ノ生セサル如ク
手入ヲ十分行フヲ要ス

第五十七 開闔螺ノ緊定ハ伸縮管ヲ保持スルヲ度トスヘシ但緊定強キ

ニ失スルトキハ螺絲ヲ損傷スルモノトス

第五十八 普通ノ手入ヲ分チテ毎日行フ手入一箇月ニ少クモ二回行フ手入及使用後行フ手入トス

一 毎日行フ手入左ノ如シ

口、伸縮管及其他ノ部品ヲ離脱スルコトナク外部及漏斗狀部ノ内部ヲ清潔ナル布片ヲ以テ拭淨スヘシ

二 口、伸縮管及開闔螺ヲ離脱シテ一箇月ニ少クモ二回行フ手入左ノ如シ

イ 自在環及開闔螺ノ鐵部ハ僅ニ含油セル布片ニテ拭淨スヘシ

ロ 口ノ外部、伸縮管外部及伸縮管ノ室ハ清潔ナル布片ヲ以

テ拭淨スヘシ

ハ 口ノ内部ハ柔軟ナル紙片ヲ通シテ輕ク拭淨スヘシ

三 使用後ノ手入ハ第一號ヲ準用スルノ外左ノ如シ

イ 口ヲ離脱シテ唾液ヲ除去スヘシ

ロ 黃銅部ニ汗等附着シテ甚シク汚レタルトキハ含水布片ニテ拭淨シタル後乾キタル布片ヲ以テ十分拭フヘシ

ハ 雨雪等ニ際會シテ濕潤シタルトキハ乾キタル布片ヲ以テ十分水分ヲ拭淨シタル後鐵部ハ含油布片ニテ拭フヘシ

第五十九

黃銅部ニ汚點ヲ生シ甚シク外觀ヲ損スルモノハ眞鍮磨ヲ用ヒ徐ニ拭淨スヘシ但眞鍮磨ハ金質ヲ減耗セシムルモノナルヲ以テ其拭淨ハ汚點ヲ拭淨スルニ止ムヘシ

第六十 喇叭ノ内部ニ甚シク汚垢ノ附著シタルトキハ口及伸縮管ヲ離脱シテ水或ハ温湯ヲ通シテ内部ヲ洗滌シタル後水分ヲ十分除去スヘシ

第四章 基本演習(附録参照)

第六十一 喇叭修業者ノ教育ハ一般教育第二期ノ初ヨリ開始シ其教育年度末迄ニ之ヲ終了スルモノニシテ基本演習ノ爲約六箇月ヲ充テ之ヲ概ネ毎二箇月ノ三時期ニ區分シ左ノ課目ヲ教育スルモノトス但騎兵及警備歩兵隊ニ在リテハ之ニ準シ適宜其各期ヲ短縮ス

第一時期

- 一 喇叭ノ構造、分解及各部ノ機能

二 喇叭ノ取扱及手入法

三 喇叭ノ操作

四 中間音及基本演習譜第一號乃至第八號竝其應用譜

五 右ニ關スル學理、唱譜及拍子法ノ大要

第二時期

一 第一時期ノ復習

二 高音及基本演習譜第九號乃至第十六號竝其應用譜

三 右ニ關スル學理、唱譜及拍子法ノ大要

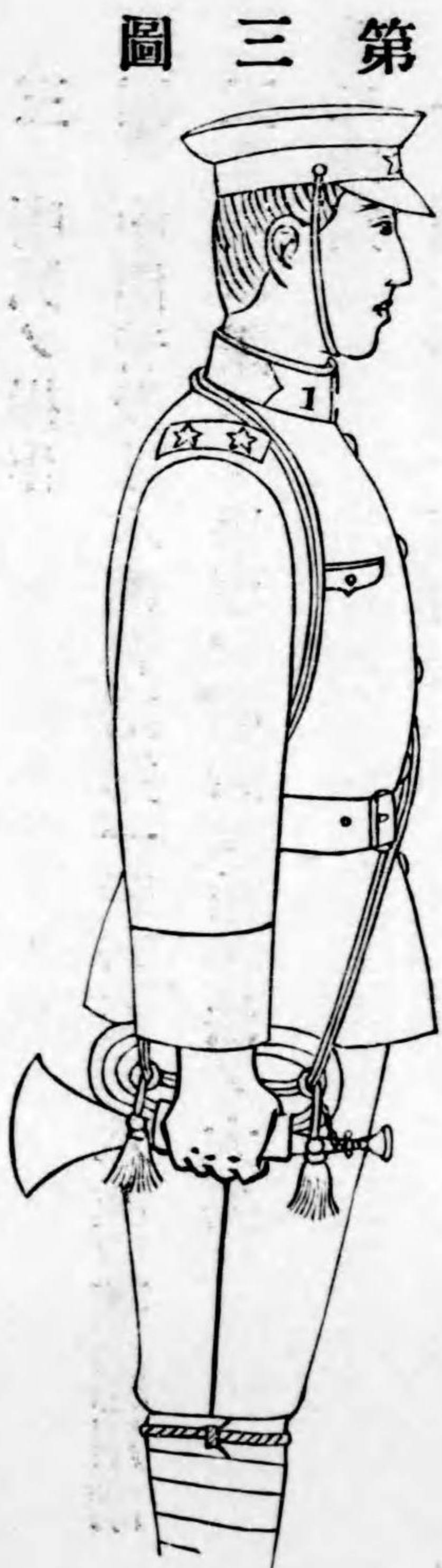
第三時期

一 第一、第二時期ノ復習

二 低音及基本演習譜第十七號竝其應用譜

三 右ニ關スル學理、唱譜及拍子法ノ大要
四 學術科ト實地トノ連繫

第六十二 喇叭ノ保持法ハ各、當該兵科ノ操典ニ據ル而シテ不動ノ姿勢ニ於テ之ヲ水平ニ携フル爲ニハ無名指ト小指トヲ過度ニ強ク握ラサルヲ可トス

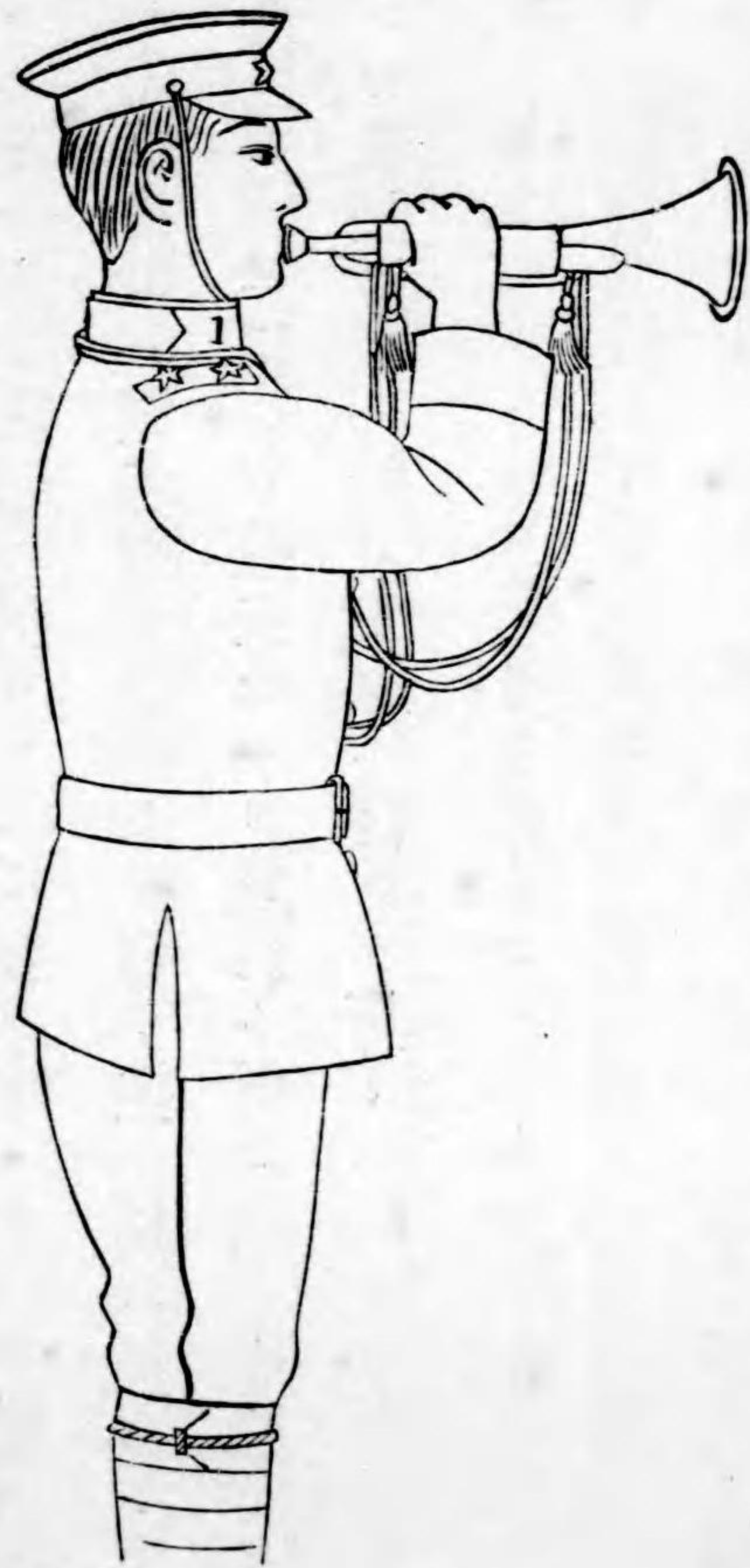


第六十三 銃ヲ左肩ニ負ヒタルトキハ左手ヲ以テ負革ノ下ヨリ輕ク銃

把ヲ握ル其法拇指ヲ内側ニ他ノ四指ハ之ヲ揃ヘテ外側ニ置キ腕關節ヲ著シク屈セサルモノトス

第六十四 吹奏ヲ始ムルニハ「構ヘ」ノ號令ヲ下ス
其法右手ヲ捷路ヲ經テ急速ニ前ニ舉ケ接著管ヲ左ニシ前身ト第一接著管トヲ同一水平面内ニ在ラシムル如ク喇叭ノ口ヲ唇ニ接著スルモノトス此際右手ノ無名指ト小指トヲ強ク握リ締ムルコトナク喇叭ヲ常ニ顔ノ前方ニ正シク位置セシメ且口ト漏斗狀ノ中心トヲ水平ニ保持センカ爲眼ヲ漏斗狀ノ上縁ニ注クヲ可トス

第四圖



第六十五 喇叭手ヲ區分シ交互ニ行進譜等ヲ吹奏セシムル場合ニ在リテハ右ノ號令ヲ用ヒス吹奏中ノ者カ第四衡程ヲ終リタルトキ逐次一齊ニ喇叭ヲ構フルモノトス

第六十六 吹奏ハ不動ノ姿勢ニテ行フモノナレトモ發音演習ノ初期ニ

在リテハ之ニ依リ修業者ノ意思及動作ヲ拘束セサル爲若干ノ自由ヲ與フルヲ得

第六十七 拍子法ニ依ル吹奏ヲ教育スルニ方リ初期ニ在リテハ速度ノ緩急ニ關セス足尖ニテ輕ク足踏ヲ爲シ速度ノ確實ヲ維持セシムルヲ可トス

第六十八 吹奏ヲ爲サシムルニハ足踏ニ應シテ適當ノ時機ニ「始メ」ノ號令ヲ下シ又之ヲ止メシムルニハ「止メ」ノ號令ヲ下ス此號令ニテ吹奏ヲ止メ第六十四ト反對ノ順序ニ依リ速ニ舊ノ姿勢ニ復スルモノトス
第六十九 發音演習ニ於テハ先ツ吹奏最モ容易ナル「ト」音ヨリ始メ次に少シク吹力ヲ強メテ「カ」音ニ移リ此二音ヲ容易ニ吹奏シ得ルニ至ラハ更ニ吹力ヲ強メテ「テ」音ニ進ムモノトス此三音ヲ中間音ト謂フ

第七十 以上ノ各音ヲ吹奏シ得ルニ至ラハ中間音ノ連續ヲ演習セシム
第七十一 發音演習ノ初期ニ於テハ總テ無衡程ニテ行ヒ又發音時量ハ之ヲ一定スルコトナク隨意ニ延長セシムルヲ有利トス而シテ多數ノ修業者一致シテ吹奏シ得ル程度ニ達セハ拍子法ニ依リ發音ノ始終ヲ指示シテ吹奏セシム

第七十二 發音演習ノ初期ニ於テハ修業者ノ吹力ト疲勞トヲ顧慮シ徐々ニ之ヲ行ヒ各音ノ發聲ヲ十分ニ演練スルヲ要ス

第七十三 無衡程ノ發音演習ニ依リ隨意ニ長短時量ヲ吹奏シ得ルニ至ラハ有衡程ノ吹奏ヲ始ム

此演習ニ於テハ拍子記號ニ基キ確實ニ其舉動ヲ守ラシムルヲ要ス

第七十四 修業者進歩ノ程度ニ應シ逐次基本演習譜第一號乃至第八號

竝其應用譜ヲ演習シ之ニ伴フ發音ノ加減及種々變化シ來ル節調時量ヲ正確ナル拍子ニテ十分會得セシムヘシ

第七十五 修業第二時期ニ至ラハ先ツ無衡程ニテ高音「ち」ノ吹奏ヲ教育ス

第七十六 「ち」音ノ教育ヲ終ラハ次ニ中間音ト高音トノ連續及不連續ヲ演習シ然ル後逐次基本演習譜第九號乃至第十六號竝其應用譜ヲ演習ス

第七十七 修業第三時期ニ至ラハ先ツ無衡程ニテ低音「ご」ノ吹奏ヲ教育ス

「ご」音ノ吹奏法ヲ會得セハ茲ニ喇叭ニ於ケル五音ノ發聲ヲ完了セルモノニシテ之ヲ適當ニ應用セハ總テノ喇叭譜ヲ吹奏シ得ルモノトス

第七十八 「ゴ」音ノ教育ヲ終ラハ次ニ中間音ト低音ノ連續及不連續ヲ演習シ然ル後基本演習譜第十七號竝其應用譜ヲ教育シテ基本演習ヲ完成スルモノトス

第七十九 以上ノ諸演習ニ於テ最初ハ總テ其速度ヲ緩ニシ修業者ノ熟練ニ伴ヒ逐次規定ノ速度ニ進メ又修業第二時期以後ニ在リテハ時々行進間ニ於ケル吹奏ヲ演練セシムルモノトス

第五章 本譜演習

第八十 基本演習ニ依リ十分ニ基礎ノ教育ヲ終リタル後其技能ヲ益々向上スル爲引續キ教育年度末ニ至ル迄本譜演習ヲ行フ

第八十一 此演習ハ主トシテ陸軍喇叭譜ヲ教ヘ且之カ練磨ヲ圖ルモノ

ニシテ術科ヲ主トシ前章ノ要領ニ準シ易ヨリ難ニ移ルカ如ク其課目ヲ撰定スルヲ要ス

第八十二 陸軍喇叭譜中修業者ノ容易ニ理解シ得サル部分アルトキハ其箇所ヲ分解シ前章ノ要領ニ準シテ教育スルヲ可トス

第八十三 本譜演習間ト雖屢々基本演習譜ヲ復習セシメ奏法ノ正確ヲ維持スルコト必要ナリ

第八十四 初年度ニ於ケル本譜演習ノ末期ニ至ラハ他ノ教練演習勤務等ト連繫シ實地ニ之ヲ應用スルコトヲ教育スルモノトス

喇叭教程終

大正四年八月十四日印刷
大正四年八月十七日發行



發行所

東京市麴町區平河町一丁目二番地

兵用圖書株式會社

電話特番町三七七四番
振替東京一八〇八八番

翻刻
發行者

兵用圖書株式會社

代表者 小林 又七

印刷者

東京市麴町區隼町四番地

高井 福太郎

278
279

終

